

日本菌学会史—1

日本菌学会創設から創立十周年まで

平塚直秀

太平洋戦争終結直後の昭和23年(1948)夏ごろから、私は今関六也、小林義雄両兄はじめ菌類研究者の有志の諸兄姉とともに、「菌類談話会」を結成して、ほとんど、毎月、東京上野公園内の国立科学博物館内で、「菌類談話会」を開きました。この「菌類談話会」では、当初は、国内外の菌類に関する研究業績の紹介が主だったと思います。当時は、未だ海外の学者達との交流がすくなく、海外からの文献の入手も極めて困難でした。それで、私たちの仲間の有志は、米軍の“CIE”の図書館に出掛けて、“Mycologia”や British Mycological Society の Transactions などの最近号掲載の研究報文の「タイトル」や「アブストラクト」を手書きで写して来て、とりあえず、談話会で報告したり、海外の研究者からの書簡を披露したり、また、海外から寄贈されたり、新に入手した図書や論文別刷などの紹介をしましました。勿論、当時は、未だ今日のように簡単に「コピー」をとるなどと言うことは出来ない時代でしたので、手書きや、古い型の「タイプライター」で論文の標題や「アブストラクト」を転写することは大変な仕事でした。終戦直後、「スイス」の E. Gäumann 博士をはじめ、数名のヨーロッパ諸国の菌学者が、小生の生死を日本政府(文部省)に問合せたことなども思出の一つです。

(1)

昭和30年(1955)12月11日、東京都文京区大塚の茗台閣で開かれた菌類談話会の席上で、小林、今関、印東諸兄と私らによって予め作成された“日本菌学会創立案”について積極的に審議されました。その結果、とりあえず菌類談話会の会員は、そのまま、“日本菌学会”の創立会員になってもらって、同学会の発展に協力することを出席者一同で約束したのです。

翌、昭和31年(1956)2月20日、東京都上野公園地内の国立科学博物館の講堂で、“日本菌学会創立総会”が開かれました。この総会では、今関氏が議長に推されて議事が進められました。まず、前年(昭和30年)12月の菌類談話会に提案され、審議された新学会の規約草案が

満場一致で承認され、会の発足が宣言され、さらに、今後の学会運営に関する具体的問題について慎重に審議されました。

総会は、草野俊助先生(日本学士院会員)を会長に推し、ついで、学会の新規約にもとずいて、会長の指名で、今関、小林、印東3氏と私の4名が幹事を委嘱されました。

(2)

日本菌学会創立当時の会員数は、50名足らずでしたが、爾来、毎年年度大会を開催されたほか、適時に例会を開きました。

第2回目の日本菌学会大会総会は、東京大塚(文京区)の東京教育大学の講堂で開かれましたが、この総会の席上、小林庶務幹事が会員総数が149名に達したが、第2期計画として、会員数を300名に倍増するよう努力したいと述べています。

なお、その後、草野会長はじめ幹事諸兄は、随時、幹事会を開いて本会の発展に努力しつづけました。特に、思い出の深いのは、草野会長のお宅(目黒区鷹番町)から比較的近距离にあるという理由もあって、東京駒場(目黒区駒場町)の東京教育大学農学部の仮校舎内の平塚研究室が、幹事会その他の学会関係の会合に当てられたことが多かったことです。東京教育大学農学部の前身である東京農業教育専門学校の本館ならびに、その付置施設は、昭和20年(1945)5月25日の米軍機による大空襲によって消失しましたので、仮校舎として、校舎に隣接していましたが、戦災をまぬがれた元陸軍東部第16部隊の兵舎と元陸軍獣医学学校駒場分校を使用したのです。

日本菌学会の幹事会の何回かは、この仮校舎内の平塚研究室(植物病理学及菌学研究室)の一室で行われました。この幹事会は、大体午後4時—5時ごろから開会され、議事の終了後は、歓談しながら夕食を共にするのが例でした。幹事会後の夕食費の一部は、毎回、各人から200円ずつ徴収していました。この夕食会の準備は、家内(利子)らの担当で、渋谷の東横デパート(現東急デ

パート渋谷店)あたりから、夕食の材料を買求めたものが多かったように思います。

幹事会終了後の夕食会で、出席者一同、北海道産の「毛ガニ」を食べたことなど思い出深いものの一つです。草野会長はじめ一同で、各自、一匹ずつの中形の「毛ガニ」をむしりながら、しばし無言で必死になって、ムシャムシャ食べている光景は、今だに眼底に残っています。当時、北海道では、「毛ガニ」が豊漁だったらしく、一匹中形のもので、150-300円ぐらいではなかったかと思えます。余談ですが、この「毛ガニ」は、現在、1匹が4,000-15,000円という高額な値がついて店頭ででています。われわれ庶民とは全く縁遠いものになってしまいました。乱獲のためか、近年は、北海道近海では、ほとんど獲れなくなったそうです。

草野会長についての思い出は、数多くありますが、その一つに、学会が財政的に苦しい時期に、学会運動のために多額の金子を寄付されたことがありました。或日、草野先生は、突然、仮校舎内の私の研究室に來られ、「国(福島県)にある私の山林の一部を売却したので、その一部を学会に寄付したいので受取って呉れないか」と、1,000円紙幣で、40万円を差出されました。今日なら、800万円以上に当る金額かも知れません。私は、早速、幹事会に計り、その金子、40万円をそのまま、駒場に程近い第一銀行(後の第一勧業銀行)池ノ上支店に取りあえず定期預金し、私の会長在任期間中の数年間は、預金の利子のみを幹事会の運用金の一部に当てました。その後、北大の伊藤誠哉先生からも、学会の運営費の一部にと10万円の寄付をうけました。草野、伊藤両先生が如何に学会の発展を心から望んでおられたかを思うと、身のしまる思いがいたします。当時の貨幣価値を考えると大金です。

日本菌学会報は、その第1号を昭和31年(1956)5月に初めて発行し、その後、昭和33年(1958)の第10号まで2ケ年間続け、これらをまとめて第1巻(総頁数148頁)としました。これらの編集、印刷所との面倒な交渉などはすべて、今関兄が担当されました。

昭和37年(1962)6月、本学会報第3巻を、草野会長の米寿の齡の記念号として刊行しました。同記念号に掲載された研究論文は38篇で、執筆した会員は50名に及んでいました。しかし、当時、草野先生は、御自宅(東京、目黒区鷹番町)で保養されておられましたが、記念号の刊行寸前の同年5月19日、正午、心臓症が起り、静かに息を引きとられたのです。まことに、残念なことでした。同年5月21日、午後一時から御自宅で告別式が執行され、私は、日本菌学会を代表して、先生の靈前に弔詞を捧げました。

昭和37年(1962)4月1日、東京教育大学農学部講堂で開かれた日本菌学会第6回大会、総会で、草野先生のおあとを継いで、私が第二代目の会長に選ばれました。

(3)

日本菌学会は、年とともに充実し、会員数も増加して、昭和41年(1966)5月15日には、創立十周年記念祝賀式典と記念東京大会を、東京教育大学農学部講堂であげることが出来ました。

記念式典は、当日午後四時、東京教育大学の学生の有志による器楽の演奏に初まり、開会の辞につづいて、私が、会長として、つぎのような式辞を述べました。

式 辞

日本菌学会は、昭和31年2月20日、国立科学博物館において創立総会を開いて発足致しましたが、本年をもって創立満10周年を迎えることが出来ました。

ここに、本学会々員ならびに御支援、御協力をいただいている各位とともに一堂につどい創立10周年記念式典をあげることの出来たことは、まことに喜ばしい次第であります。顧みますと、本学会は、発足当時、故草野俊助博士を会長に推し、50名足らずの同志によって孤々の声をあげたのでありますが、10年後の今日では、正会員546名(在外会員23名)と賛助会員10名を擁するまでに発展致しました。

本学会の事業も昭和31年以来、年とともに拡大され、学会の重要な事業の1つは学会報の刊行であります。既に刊行された会報の総頁数は約1,000頁に及んでおり、そのなかに掲載された原著研究論文は、117篇にのぼり、これらのうちには海外の著名な菌学者による貴重な研究論文も数篇含まれております。さらに毎年恒例として行われる年次大会・各地方で催される本学会主催の菌類採集会も年とともに盛大になって参りましたが、また東京、関西、北海道などの地区においても本学会支部の月例会または、随時談話会、菌類採集会を催して研究発表、研究者相互間の連絡、菌類愛好者への奉仕などに努めて参り、それぞれの成果があがっていると信じております。

つぎに、申し上げたいのは、本学会の名において、または会員個人としての海外の学会または研究者との交流が年とともに盛んになり会員の海外の国際学会に出席され、または、世界各地の菌類調査に赴かれ貴重な研究成果をあげられた方々も年々増加致しておることです。たとえば小林義雄博士一行の昭和38年度におけるニューギニア、ニュージーランド、オーストラリア、南極の調査、昭和40年度におけるアラスカ北極圏カナダの調

査、つづいて本年4月上旬から1ケ年にわたるマライ・ボルネオ地域の調査の如きはその代表的な壮挙でありましょう。

以上、本学会発足以来10ケ年間を期してさらに一層躍進し、本学会発足にあたり故草野会長が示された本学会の方針、すなわち、菌類につながる各種の分野の研究の融和を計り、互に横の連絡を保ちつつ研究を進め各部門の進歩に貢献する一方、一般菌類愛好者にも手をさしのべるユニークな学会として育てると言う方針をあらためて想起し、会長として会員各位とともに本学会の発展、ひいては、本学会を通じて世界の菌類学界に資するとともに、一方、一般菌類愛好者への奉仕にも努力致したい所存であります。

終わりにこぞみ、本学会が今日のように順調に発展して参りました陰には、本学会役員各位の並々ならぬ御盡力、とくに、公務のお忙しい身にもかかわらず、献身的に会務処理に当たっていただいたことを忘れてはならないと思います。ここに役員各位の御奉仕に対し、会長として全会員とともに深く感謝の意を捧げます。さらに、今回本学会が計画致しました創立10周年記念事業に協賛していただいた各位の御好意に対し、本学会として衷心より厚く御礼申し上げます。

以上をもって式辞と致します。

昭和41年5月15日 日本菌学会会長
平塚直秀

会長の式辞に続いて、関連3学会—日本農芸化学会を代表して同学会会長の山田浩一博士、日本植物病理学会を代表して同学会の会長、明日山秀文博士と日本医真菌学会を代表して、同学会会長の岩田和夫博士がそれぞれ祝詞を述べられました。ついで、各地から寄せられた祝電の披露がありました。

さらに、本学会創立以来、10ケ年間に逝去されたつぎに掲げた13氏の会員の霊に、出席会員一同黙禱を捧げました。

1) 斉藤賢道、2) 逸見武雄、3) 井口ヤス(旧姓、本間)、4) 草野俊助、5) 伊藤誠哉、6) 山本和太郎、7) 中村寿夫、8) 原 攝祐、9) 亀井専次、10) 眞保一輔、11) 服部広太郎、12) 島袋俊一、13) 岡崎義一(逝去された年月日順に氏名をあげました)。

閉式の後、小林義雄博士の記念特別講演がなされました。その夜は、祝賀懇親会が開かれました。会場は、東京教育大学農学部本館内の別室の大会議室でした。

創立十周年記念菌類採集会は、昭和41年(1966)8月13、14日の両日、北海道の支笏湖畔と北海道大学農学部・苫小牧演習林で催され、当日の参加者は、およそ40名

で、非常に楽しい、有意義な採集行だったようでした。私の乗った東京空港(羽田)発千歳空港行きの航空機が悪天候(濃霧)のため千歳空港に予定通り着陸出来ず、羽田空港に引返すという「トラブル」から、私は、ついに、残念ながら参加出来ませんでした。

(4)

創立十周年記念鳥取大会は、昭和41年(1966)10月11日—13日の3日間、鳥取県内で開催されました。この鳥取大会には、全国各地から135名の多数の日本菌学会員の参加があり、これらの参加者は、対翠閣(「しいたけ」会館)はじめ、鳥取市内の小銭屋旅館、観光ホテル、いなば荘、永楽ホテル、白兔荘などに分宿されましたので、小都市の鳥取市も一時学者の「メッカ」になりました。

第1日目(10月11日)は、鳥取市末広温泉町に在る農協会館で講演会が開催され、私(会長)の特別講演(銹菌の分類とその問題点)につづいて、“トリコデルマ菌に関する総合討論”という題の下で、「シンポジウム」が行なわれました。この「シンポジウム」には、古川久彦、小松光雄、大島俊市、斎藤 紀、土居祥兌、杉山純多、橋岡良夫の諸氏が討論に参加されましたが、非常に有意義な「シンポジウム」であったと思います。

第2日目(10月12日)は、菌学会員が中心となって、地元の菌類同好の人達も加わり、鳥取市内の久松山(城山)と鳥取砂丘地帯で菌類の採集が行なわれました。しかし、砂丘地帯では、突如予想外の強風雨に襲われ、参加者の大半は途中で引きあげざるを得ない事態となったのは誠に残念なことでした。同日の午後は、市内の農協会館で、菌類の鑑定会が開かれ、珍しい菌類の展示などもあり、会員以外の菌類愛好者も数多く聴講されました。また、同日の午後、鳥取市内の日本生命ビルの講堂で、今関六也、小林義雄、印東弘玄の3氏による記念講演会が鳥取市の高校生と市民のために開かれました。

第3日目(10月13日)は、舞台を西に移して、鳥取県西伯郡内にある、鳥取県西伯郡内の大山隠岐国立公園の主要部分を占める大山(海拔1,731m)の中腹一体で菌類の採集が行なわれました。

日本菌学会創立十周年記念の鳥取県内における行事が、盛大にまた有意義に終始できたのは、鳥取県、鳥取市の後援、財団法人日本きのこセンター理事長常田 修氏をはじめ、財団の諸氏ならびに、地元の旧友、知己各位の好意によるところが非常に大きかったことも忘れられません。

(5)

昭和41年(1966)12月1日、日本菌学会創立十周年記

念号が、同学会会報第7巻、第2、3号として刊行されました。この記念号は、日本菌学会会員各位による研究報文、56篇（総頁数378頁）を集録された立派なものになりました。これは、全く、投稿された会員諸兄姉と直接、編集に当られた会員諸兄姉の努力の賜物です。この記念号の巻頭に掲げました会長（平塚）の序文はつぎの通りです。

序

日本菌学会は、昭和31年2月20日、国立科学博物館において創立総会を開いて発足し、本年をもって創立満十周年を迎えることができました。

顧みますと、本学会は発足当時、故草野俊助博士を会長に推し、50名足らずの同志によって孤々の声をあげたのでありますが、十年後の今日では正会員550名（内外会員24名）と賛助会員10名を擁するまでに発展しました。

本学会の事業も昭和31年以来年ともに拡大されましたが、その概況をつぎに簡単に述べさせていただきます。

学会の重要な事業の1つは学会報の刊行であります。既に刊行された会報の総頁数は約1,000頁に及んでおり、掲載された原著研究報文は120篇にのぼり、これらのうちには海外の著名な菌学者による貴重な研究報文も数篇含まれております。さらに、毎年恒例として行なわれる年次大会、各地で催される本学会主催の菌類採集会も年とともに盛大になってまいりましたが、また東京、関西、北海道などの地区においてもそれぞれ本学会支部の月例会または談話会、菌類採集会を催して研究発表、会員相互間の親睦、研究連絡、一般菌類愛好者への奉仕などに努め、それぞれ多大の成果があがっていると信じております。つぎに申し上げたいのは、本学会の名においてまたは会員個人として海外の学会または大学研究所の研究者との交流が年とともに盛んになったことで、会員の海外の国際学会に出席され、または、世界各地の菌類調査に赴かれて貴重な研究成果をあげられた方々も年々増加しております。

この機に、さらに一層躍進し、本学会発足にあたり、故草野会長が示された本学会の方針、すなわち、「菌類につながる各種の分野の研究者の融和を計り、互に横の連絡を保ちつつ研究を進め各部門の進歩に貢献する一方、一般菌類愛好者にも手をさしのべるユニークな学会として育てる」と云う方針をあらためて想起し、会長として会員各位とともに尚一層本学会の発展、ひいては本学会を通じて世界の菌学会に寄与するとともに、一方一般菌類愛好者への奉仕にも努力いたしたい所存であります。

す。

本年、5月15日、東京教育大学農学部において本学会創立十周年記念式典ならびに記念東京大会が開催されたのを皮切りに、ひきつづき記念事業として10月11日、鳥取市における記念鳥取大会、8月13、14日両日、北海道（主として支笏洞爺国立公園）、10月12、13両日、鳥取県（山陰海岸国立公園鳥取砂丘地区、鳥取市付近、大山隠岐国立公園伯耆大山地区）における菌類採集会がいずれも予想以上の盛会裡に行なわれましたが、さらに、このたび会員各位による研究報文56篇を集録した本学会創立十周年記念論文集を刊行した次第であります。

終りに、今回、本学会が計画しました創立十周年記念事業に協賛していただいた各位に対しその御好意を衷心より厚く御礼申し上げます。

昭和41年10月31日

日本菌学会会長 平塚直秀

物故会員の追悼

本学会創立以来、現在にいたる10ヶ年間に逝去された会員は13名であります。逝去された年月日順に氏名をあげますと、

- 1) 齊藤 賢道 2) 逸見 武雄 3) 井口 ヤス
- 4) 草野 俊助 5) 伊藤 誠哉 6) 山本和太郎
- 7) 中村 寿夫 8) 原 攝祐 9) 亀井 専次
- 10) 真保 一輔 11) 服部広太郎 12) 島袋 俊一
- 13) 岡崎 義一

の方々であり、いずれも、菌学界に偉大な足跡を残され、また日本菌学会発展のために力を致された方々であることをあらためて追悼したいと存じます。

日本菌学会会報

創立十周年記念号

日本菌学会発行（事務局：東京都台東区上野公園、国立科学博物館内）

TRANSACTIONS
OF
THE MYCOLOGICAL SOCIETY OF JAPAN

The Tenth Anniversary
of
The Mycological Society of Japan